

吉椿雅道講演「コロナ禍と学生ボランティア —トルコ・シリア地震の被災地の現状と若者—

鈴木 静・青木 理奈・福井 秀樹
小佐井良太・石坂 晋哉・太田 響子
池 貞姫・十河 宏行・中川 未来

はじめに

2020年2月頃から日本のみならず世界中で、長期にわたるコロナ禍に突入した。大学においては、ボランティアなど学生の課外活動はもとより、遠隔授業への切り替えなど授業提供体制も激変した。この未曾有の状況のなか、私たちは愛媛大学法文学部学生を対象としたコロナ禍の影響調査を継続的に行ってきた¹⁾。学生のボランティア活動も、停止せざるをえない時期もあり、2022年になると活動は再開しつつあるもののコロナ禍前の活動状況に戻れず苦労している状況が見られた。

こうしたなか、CODE 海外災害援助市民センター（以下、CODE）で学生ボランティアやインターンを受け入れ、国内外の被災地等で活動していることを知る。コロナ禍における学生ボランティアの活動状況と環境整備について知りたいと考え、2023年3月に CODE 事務局長である吉椿雅道氏をお招きして、公開研究会を開催した。

吉椿報告では、公開研究会直前に発生したトルコ地震の現状とともに、学生ボランティアの意義をお話いただいた。

以下は、2023年3月16日の吉椿氏の報告内容である。

少数民族の支援から災害支援の現場へ

阪神淡路大震災の時に、親友が被災をしたことがきっかけで、この仕事をしています。それ以前は、海外の少数民族や先住民の支援をしていました。2000年前後は、海外の NGO の現場を見てまわったり、アジアを放浪したりしていました。CODE に所

1) 青木理奈他「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存 I—学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果—」愛媛大学法文学部論集社会科学編50号、2021年、p37～68等で、ボランティアなどの課外活動を含む制限された状況について学生らの心境や被害状況の一部を明らかにしてきた。

属し、スタッフとして働き始めたのは2004年からです。

国内外の災害支援というと、被災直後の緊急支援を行っているイメージをもたれる方が多いと思います。緊急支援というのは、いわゆる救護物資を送ったり、食料や寝る場所、医療の提供などを言います。僕らが行っているのは、緊急支援というよりも復興支援です。災害後の生活を中長期的に再建していくことです。たとえば、住宅を再建することや心のケアなどを言います。災害が発生した直後の緊急段階でも現場に行きますけれども、主にその後の復興支援を担っています。

被災地の人たちと一緒に生活や住宅を再建する

これまで取り組んできた復興支援を紹介します。

アフガニстанは、災害だけでなく紛争も多いです。ある地域は、武装勢力タリバンによってぶどう畑が焼き払われました。それまでぶどう栽培で生計を立ててきた人たちの生活を再建しました。日本からの寄付でぶどうの種や農機具を買い、ぶどうを再生していく支援をしており、一番長いプロジェクトで現在まで20年近くも続いています。

インド西部地震（2001年）、ネパール地震（2015年）では、災害後の住宅再建を行っています。ご存じの通り、地震が人を殺しているわけではなくて、建物が人を殺しているわけです。そうであれば、やはり耐震の住宅を再建しなければいけない。ただ、途上国と言われている国では、資金的な問題もありますので、できるだけ安価で、かつ現地の伝統的なスタイルに耐震補強していくようにしています。図1の右上はインドで、シェイクテーブルと言って、振動台の上に模型を置いています。耐震補強した住宅と従来型の住宅を並べておいて、地震にみたくてテーブルを揺らします。耐震補強していない住宅は、ぐしゃっと潰れます。わかりやすく、現地の人たちに耐震という概念を伝えていきます。日本人は耐震というと当たり前のように思いますけど、途上国はそうでもないんですね。そういうことをデモンストレーションしながら行います。テーブルを取り囲んでいるのは、大工さんや石工さんです。図1の左



(図1)

下は、ネパール地震の際に支援に入った時です。山のなかを2日間歩いていかなければいけないアクセスの厳しいところです。ここでは、セメントや鉄筋を使った耐震補強はできないので、石や泥や竹など、現地の伝統的な工法に耐震補強していく方法をとりました。木製のバンドで、建物の壁を繋いでいきます。これは

地元の大工さんやネパールのエンジニアの人たちにも入ってもらい、可能な限り現地の資材を使って一緒に取り組んできました。右下は、フィリピン台風（2013年）の時です。貧困層の住む漁村が被災し、生活再建をしていくためボートを提供しました。このように災害後の復興、すなわち生活を再建していくための住宅再建や生業を回復していくことをやってきました。

近年の感染症まん延や政変・紛争の被害への支援

最近、新型コロナウイルスの蔓延や、世界各地で紛争や戦争が起きており、自然災害以外の被害も増えています。

コロナ禍では、これまで海外でつながってきた現地の NGO を通じて、活動してきました。新型コロナウイルスが最初に爆発的に広がった中国の武漢は、76日間ロックダウンしました。武漢では、実



(図2)

に3万人もの市民ボランティアが活動していました。高齢者、妊婦などを市民が支えたんですね。僕らは現地には入れないので、遠隔でサポートしました。

ほかには、フィリピン台風で被災をした女性たちが、コロナで仕事がなくなり生活が困窮しました。その人たちのサポートをしようと、資金を送りました。現地の女性たちが炊き出しや野菜を育て、貧困層に食事を提供しました。

最近ウクライナから避難してきている方たちを支援しています。神戸市には105人が避難してきています。その方たちに野菜を届けています。救援物資は多様にはありますが、新鮮な野菜はなかなかありません。避難している人たちに野菜を届けて何になるのかと疑問に思うかもしれませんが、野菜を届けることはあくまでもツールです。野菜を届けて、立ち話をしたり、お家にあげてもらって生活状況を見せてもらいます。お話する中で、その人たちの暮らしぶりが見えてくる。そこが非常に重要なポイントです。野菜を届ける支援をしながら、新たなニーズが見えてくることもあります。

トンガ火山噴火災害では、海底火山が噴火したことで津波が発生し、火山灰が降り農作物がかなり枯れてしまいました。僕たちは、農家さんたちの支援もしました。

トルコ・シリア地震の概要

阪神淡路大震災から始まって、この28年間で、36の国と地域で66回の救援活動を行っています。66回目は今回のトルコ地震です。ご存知の通り、トルコは99年にも大

きな地震があり、1万7,000人以上の方が亡くなっています。99年の時はイズミットが震源でした。そのすぐ近くのデリンジェで、現地で教育文化センターを再建したり、子ども達自身が運営するテントを再建したりしました。

今回のトルコ地震に関しては、地震の4日後に現地に入りました。報道にある通り、かなり大規模な地震でした。東アナトリア断層が動き、かなり広範な地域で被害が出ています。今回の地震では、3月6日現在で5万人の方が亡くなっています。実は昨日(3月15日)に、この被災地に大雨が降り、さらに洪水が発生しています。災害が立て続けに続くというのはよくあります。

トルコに行ったのは、2月10日から18日、約1週間です。僕と関西学院大学3年生の植田隆盛君と2人で行き、現地 NGOと一緒に調査しながら、救援物資を提供してきました。被災地は広く、全て回れるわけではないのですが、ガジアンテブを拠点にして、4カ所ほどを回ってきました。


局所的な被害があったガジアンテブ

ガジアンテブは南部最大の街で約200万人が住んでおり、地震後も街は普通に機能しています。一見大きな被害はないように見えますが、局所的に被害を受けていました。街は古い風情のあるところですが、モスクが倒壊したりガジアンテブ城の城壁が崩れたりしています。公園に避難キャンプができていて、そこには

**トルコ・コジャリエ地震
(イズミット地震)**

日時: 1999年8月17日
 規模: M7.6
 被害: 死者1万7127人
 行方不明者4万3953人

阪神大震災地元NGO救援連絡会議
 (CODEの前身)の支援
 ・市民文化教育センターの建設
 ・「愛と望みのテント」で子どもたちを支援




(図3)

トルコ・シリア地震の概要

日時: 2023年2月6日(月)4:17(日本時間10:17)
 震源: トルコ東部ガジアンテブ県ヌルダ郡東26km
 規模: M7.9 震害1700名
 余震: 2/6 13:24(日本時間19:24)にM7.5
 2/21 20時すぎM6.3の余震が発生
 * これまでに7200回の余震

被災地: 「トルコ」ハタヤ県、ガジアンテブ県、カフラマンラッシュ県、アディヤマン県、マラチア県、ディヤルバクル県、アダナ県など11県
 「シリア」イドリブ県など10県43地区

被害: 死者5万人1882人、負傷者11万人以上(3/6時点)
 (トルコ4万5968人、シリア5914人)
 被災者1960万人(約148万人がテントや避難所で生活)
 倒壊家屋 約34万5000棟(トルコ国内) 19600人が被災地から避難(2/14)



(図4)

CODE第1次派遣と訪問した被災地の概要

【第1次派遣】
 日 程: 2023年2月10日(金)~18日(土) *現地滞在9日間
 派遣者: 植田隆盛(CODEインターン、関西学院大学3年生)、杏持雅道(CODE事務局長)
 現地協力者: 藤本孝志(タケシエム・トルコ日本語研修所)・ヒトコウユキ(学生)
 ハサラン(NGO ACEVコーディネーター)
 メリメイトさん(Active Participants Associationメンバー)

内 容: 被害状況の調査、今後の復興支援に向けた被災者へのヒアリング、救援物資(防寒具、用具、テント、マフラー)の提供、現地のNGOやボランティア団体との協働など

県	自治体	世帯	人口	被害状況
ガジアンテブ県 (人口215万人)	9	ガジアンテブ市 ヌルダ郡	85万人	死者3,223人 負傷者12,468人
カフラマンラッシュ県 (人口116万人)	11	オニキシュ市 トルコディヨナボ市 (旧カフラマンラッシュ市)	45万人 22万人	死者11,646人 負傷者5,000人
アディヤマン県 (人口63万人)	9	アディヤマン市	26万人	死者3,225人 負傷者13,778人

(図5)

被災地の状況

【ガジアンテブ市内】

- ・町は通常通り機能しているが、局所的に被害を受けている場所もある。
- ・トルコ人だけでなく、クルド人、シリア人も避難している。
- ・大半は、家屋に亀裂などが入り、恐怖から公園に避難して暮らしている。
- ・市内の被害が見えにくい事から、避難キャンプにいる人たちの支援は手薄になっている。

【ガジアンテブ県ヌルダ郡】

- ・ここには被害を受けていなかった事から、NGOが、郡政府と連携して郡内の3カ所に7000戸のコンテナを20日間で仮設住宅として建設している。
- ・ヌルダ郊外には地震による大きな亀裂が入っている農村では戸建て住宅の被害がある。
- ・町のすべてを一度更地にして、新しい街を再建する(郡知事)

(図6)

クルド人がいました。シリアの国境に近いのでシリアの難民も来ていて、ボランティアが炊き出しをしていました。支援者の多くは、被害の大きいカフラマンラシュ、ハタイに行っていたので、局所的な被害があるところに支援が来ていない状況でした。炊き出しはわずかにしていましたが、段々なくなっている状況でした。ここはテントで寝ていらっしゃる方がほとんどでした。

仮設住宅再建により報道されるようになったヌルダ

僕らが行った時点では、ヌルダについての日本の報道はほとんどありませんでした。しかしトルコ国内で、最初に仮設住宅が再建されたことに伴い、日本でも報道が増えました。ヌルダは断層の近くにあり、大きな亀裂が入っている地域です。4万人の町でそれほど大きな町ではありませんが、仮設住宅の建設が始まっていました。しかし多くの人たちがテントで寝ていました。イスラム教の方も多く、テント村の中には礼拝所が設けられていました。



(図7)

神戸の地形に似ているカフラマンラシュ

カフラマンラシュは、地形が神戸に似ています。神戸は931mの六甲山脈のふもとに、斜面にへばりつくように街ができていますが、カフラマンラシュも3,000mのタウラ山脈のふもとに、斜面にたくさんの町が広がっています。異なることといえば、斜面のあちこちに高層マンションが建っていることです。その高層マンションがごとごとく倒壊しています。建物の構造上の問題もありますが、実はこうして建物が潰れている集落は歴史的にはスラムだったところでした。もともとは田園地帯で軟弱地盤だったところに、スラムが形成され、その後に街ができました。被害の背景にはこういうこともあります。僕らが行った時は、ライフラインが全てストップしました。ご飯を食べるところもない、電気も通っていない、水もありませんでした。そのため避



(図8)

被災地の状況

【カフラマンラシュ市内】

- ・標高3000m級のタウラス山脈を背に斜面に町が広がる。(六甲山と神戸に似ている)
- ・市内中心部の高層マンションが多数倒壊している。
- ・助産師、町のいたるところでAAAD(国家緊急事態管理庁)によって捜索活動が続いており、その町家数が増えつつあると見られる状況が広がっている。
- ・市内のライフラインがストップして、開いている店は一つもない。
- ・ある学校の遊具等は、暖房、電気、シャワーも完備しているが、近くの避難所はテントで寝、水もないところもある。→避難所間の格差がある。
- ・凍在半中はライフラインも少し復旧し、応急危険度判定を行われ、倒壊を免れたマンションに暮らす人もわずかにいた。

【アディヤマン県アディヤマン市内】

- ・市の中心部の通りもビルやマンションがごとごとく被害を受けている。
- ・通りから路地を入ると戸建ての住宅も多く、同時に築20年くらいの家屋が多く被害を受けている。
- ・空襲地や公費が避難キャンプになっていてテントで生活している人也在。
- ・学校や施設についてNGOが捜索、炊き出し、物資配布などの活動をしている。ここには政府からの支援はない。NGOスタッフ・ボランティアも学校や家で寝ている。

(図9)



(図10)

難キャンプに行くと、僕らも炊き出しをご馳走になったりしていました。避難生活は非常に過酷な状況が続いていました。

滞在の後半になると、ライフラインが少しは復旧してきました。その頃には政府職員が、建物の応急危険度判定の調査をしていて、調査が終わったところから住民は戻ってもよいのですが、生活できる基盤がなく、ほとんどの人は戻っていませんでした。

24時間体制で捜索活動を待つ人たち

アディヤマンは中規模の街で26万人の街ですが、無数に避難キャンプがあり、統廃合が進んでいました。日本でもよく起きることですが、政府は管理するために、あちこちある避難所をまとめていきます。また、NGOが自分たちの拠点を作り、たくさんのボランティアを動かしながら支援活動をやっていました。

カフラマンマラシュの倒壊現場ですね。本当に見渡す限りのビルが倒壊していますが、残っている建物もあります。被災者の方にヒアリングをしていきますと、皆さんが「この辺りで倒壊したマンションは全部同じ会社が建てたんだ」と言います。右下の写真を見てください。捜索活動が続いていたので、倒壊現場の前で皆さんが、24時間体制で焚火を囲んでいました。深夜になるとマイナス6度か



(図11)

7度くらいになるので、暖を取りながら、生存者や被害者が発見されるのを待っている。右下の写真の奥に光が見えますね。これは重機の照明で、政府が捜索活動をやっているところです。通常、200時間が生死を分けると言われていますが、今回は200時間以上経って救出された人もいました。それで皆さんは、希望をもって待っていたのです。残念ながら、多くが亡き骸として帰ってきたのですが。

避難所にも格差があります。日本のような指定避難所はなく、すべてボランティアが運営しています。左上の学校は、世界銀行の資金で建てた学校で、発電機を持っていました。校長先生たちが地震直後から、学校に電気をつけました。周りは全部停電しているので、皆が集まってきました。自発的な動きです。太陽パネルもあり温水シャワーが出るので、1,000人くらいが避難していました。一方、近くの学校では、

校舎に被害が出て、寝ることも難しい状況でした。校庭にテントを張って、絨毯一枚だけで寝ている方もいました。避難所間の格差が非常に大きかったです。アディヤマンは、倒れなかった建物と、ぐしゃぐしゃに潰れた建物のコントラストがあり、何とも複雑な心境でした。

過去の大地震から学んでいない

この人たちがボランティアです。トルコ中からボランティアが駆けつけていて、話を聞きました。大学生でしたが、トルコ人としてここに駆けつけるのも当然のことだと言って、炊き出しや物資の運搬などできることを一生懸命していました。

僕はとにかく歩き回っては被災した方に話を聞き、被災地の状況を把握し、もともとの暮らしを推測していきます。とにかく歩きます。

今回はもともとつながりがあった藤本さんという方とともに動きました。藤本さんはトルコの大学で日本語教師をされていて、その学生さんが、渡航する前に伝えてくれたことがあります。「1999年の地震から何も学んでいない」ということです。これはすごく重い言葉だと思います。

1999年大地震があって、トルコはAFAD（災害緊急事態管理庁）が作られ、耐震基準が整備されてきました。しかしこれほどの被害が出たということは、どういうことか。トルコの耐震基準は世界最高基準のものですが、実際には遵守されていないということです。会社などが建築認可を申請する際に、お金を払えば簡単に認可されてしまい、違法な建物がたくさん造られてしまった。イスタンブール工科大学の先生が、最新の耐震基準が守られていれば、こんな被害はなかったはずだと言っていました。

言葉の背景にあるもの

被災地に入って話を聞いていくと、たった一人が語った言葉に、様々な背景があることに気づかされます。被災地の状況とか、もともとある社会背景みたいなことを想像することになります。到着した当日、避難キャンプに行ったら、日本語で女性が話しかけてくるんですね。ご存じの通り、埼玉県蕨市には、クルド人コミュニティがあり、通称ワラビスタンと呼ばれています。ご存じの通りクルド人は国家をもたない世界最大の民族と言われていて、トルコやシリアにたくさんのクルド人がいますが、日本にも難民として来られている方がいます。トルコは世界最大の難民受け入れ国で、



(図12)

地震前からシリアから難民を受け入れています。この方と話をしていると、「日本大好き。トルコいらぬ」と言います。トルコには仕事がないからだそうです。この一言は、クルド人とかシリア難民が置かれている状況を象徴しています。現地の方に聞くと、トルコは難民をたくさん受け入れています、トルコ人とクルド人の間の軋轢は大きいそうです。またトルコ人同士でも経済格差があるので、トルコにシリア難民やクルド人が入ってくると、貧困層の人たちは自分たちの仕事を奪われる危機感が背景にあります。この方たちも「トルコにいるよりは日本にいた方がいい」ということを言っていたのです。

NGOメンバーの妹さんは、娘さんをマンションの倒壊で亡くしました。その妹さんは涙ながらに「なぜ、私の娘がいたビルは崩壊して、隣のビルは残っているんだ」というわけです。政府が38万棟の建物の調査をしたら、11万棟が被害を受けて同じ数ぐらい被害がない建物もある。耐震基準を守れば、被害は防げたということなんです。象徴的な被災地の風景です。

エルドアン大統領は、わずか1年で被災地の全住宅を再建すると言っています。仮設住宅は、猛スピードで建設されていますが、パン職人は「政府にはいろんな顔がある」と言っていました。トルコ住宅開発局という政府の機関がありますが、そこが建てた建物はほとんど倒壊していない。民間が建築認可を受け建てたところは潰れています。それがほぼ同数であり、13万棟と11万棟という非常に皮肉な状況が起きています。トルコには、耐震基準もあるし技術も能力もある。しかし耐震基準が遵守されていないことが一番の問題であるということです。

将来の災害を見据え、若い力をどう活用していくのか

トルコの学生ボランティアは、被災地に來た理由を「トルコ人として共に働きたいから」と言っていました。話を聞いていたのですが、最後に「僕たちの話を聞いてくれたのは君たちだけだ」と言ってすごく喜んでくれたのです。

トルコはトップダウンで復旧復興が進んでいます。また、NGOも大規模なのでやっぱりトップダウンなのです。学生ボランティアの一人一人の思いを、誰も聞いてくれなかった背景があります。トルコも日本と同じように非常に災害が多い国ですので、将来の災害を見据えて、若い力をどう活用していくのかを考えていく必要があると思います。

トルコの人々の自負

パン職人さんに「日本や外国に期待することはありますか」と聞いたら、「いや、何も期待してない」と答えました。隣で聞いていた藤本さんが、「トルコ人というの

は誰かにやってもらうよりも自分たちでやりたい」からだと教えてくれました。トルコの人たちの主体性とか、自負というか誇りを感じました。当事者の主体性は、支援者の間では当たり前と言われるんですが、実際には支援者が旗を振って、表に立つことが多くなる現実があります。そうではなく、まさにトルコの人たちが「やればできる」という自負があるのを前提に、僕らがどれだけ一人一人を尊重した支援ができるかが問われていると感じました。

トップダウンが切り捨ててしまう被災者の声

復旧復興に関しては様々な課題もあります。猛スピードで、住宅再建が行われています。年内には、恒久住宅に入居させる動きもあります。大統領は5月に選挙を控えていることもあり、復旧復興の評価も問われるので、一生懸命やろうとしています。しかし、トップダウンのかつスピードが速いやり方は、被災者の人々の声が切り捨てられる懸念があります。仮設住宅がたくさんできているのはよいことなのですが、丁寧な仮設内でのソフトの面での丁寧な支援が必要です。この課題については現地のNGOと共有しているところです。

焚火の力

トルコで象徴的だったのは焚火の風景です。僕は、阪神淡路大震災を思い出しました。あの時もみんなが焚火をしながら、悲しみを分かち合いました。トルコの被災地では、いたるところで焚火の風景がありました。焚火を囲みながら、家族の帰りを待ち、時に泣いたり、時に笑ったり、歌を歌ったりしていました。



(図13)

焚火というのはすごいです。焚火はさまざまな被災地で見られる現象ですが、トルコでは焚火を囲みながら、悲しみを共有し合っているんだと実感しました。トルコの人にはチャイ（紅茶）をよく飲みます。どこに行ってもチャイを振る舞ってくれました。

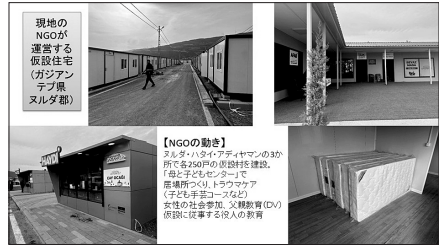
復興支援の課題

トルコの人たちが自分たちで支え合っている、それを支えていくことが大事だと痛感しました。大きな支援から取りこぼされていく人たちを、NGOが最後の一人までを救援できるかが大きな課題だと思っています。また学生交流や、仮設住宅内での暮らしのサポートも考えています。中長期的には耐震の住宅再建もできればいいなど

思っています。NGOとしては、一人一人の声を大切にしていきたいです。

仮設住宅は、このようなコンテナハウスです。コンテナなので、どんどん置いていくので、整備は早いです。仮設住宅内にはすでにチャイ屋ができています。

しかし、連携している NGO からみると、課題は多いです。トラウマを抱えている子どももたくさんいて、そういうお母さんと子どもの居場所づくりが必要だとみています。イスラムということが影響しているのか、実は男性によるDVが結構多いことがわかっています。その対応としては、お母さんを避難させるとともに、お父さんの教育プログラムを考えています。ほかには、女性の社会進出をどう支援していくかも課題です。

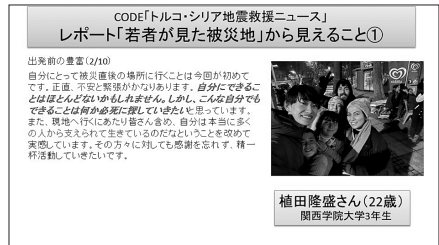


(図14)

学生ボランティアの被災地での葛藤と成長

ここから少し若者の視点で考えていきます。今回、関西学院大学の学生が、トルコと一緒に行きました。トルコに行く前は、彼はとても緊張していました。災害直後に、しかも海外の被災地に行くのですから当然かと思えます。彼は(CODE発行のニュースに)「自分にできることはほとんどないかもしれません。でもこんな自分でもできることは何か必死に探していきたい」と書いています。そして被災地に入り、2月13日には「見かけだけ、自分の感じたことだけで判断せず、人と直接話すことが大事だ」と気づきます。「全員が互いに支え合い、必死に生きようとする姿」に衝撃を受けたり、自分が知らないこと、経験したことのないことが多すぎて、また被災一つ一つの状況が違いすぎて、「自分の中で整理がつかない」と書いています。

トルコの人たちは、結構明るいんですよ。焚火を囲んでいて、その近くでは捜索が続いている。まだ遺体が見つからない状況でも、みんな笑ったり、紅茶を飲んで励まし合ったり、癒し合ったり、慰め合ったりするんです。それに対して彼の印象としては悲壮感はなかったという。確かに悲壮感はない。他の国に比べるとトルコの人たちは非常に明るくて、みんなが助け合っている。しかし、同時に深刻な思いも抱え



(図15)

ている。そうした心境がわかるから、彼も「整理がつかない」という言葉で表現しているんです。さらに、トルコの人たちを「自分の中にいろいろな感情が混ざり合っている人たち」と書いているんです。彼のこの言葉に、僕らがハッとさせられます。特に、僕はこういう仕事をしているので、変な意味で被災地やその状況に慣れてしまっているところがあります。彼のように、目の前の状況を新鮮に見られなくなることもあるので、初めて被災地に行った学生さんの声を聞くと、ハッとさせられます。

この後も、被災した人たちが「いつヘルプは来るんだ」と、彼に何度も訴えてくるわけです。彼はそれを聞き続けて、「この状況を日本に伝えます」としか言えないわけです。その状況を変えることもできずに、もどかしさを感じているということを何回も書いています。

ほかには、寒さに対しても葛藤を持ちます。自分たちはホテルで寝ていて、被災した人たちはテントで寝ているという状況に対してです。さらには、現地の価値観についてです。イスラムの人は「インシャラー」と言って、目の前に広がっている現実が運命だと考えるのです。そういう考え方に対して、良い面もあれば悪い面もあると思うのです。その上で、彼のような「外の人間が、それを壊してしまうのではなく、気づけるきっかけをつくるのが大事なだろう」と考えるのですね。

被災地で話を聞く中で、ますます彼は、被災者に向き合っていたのだろうかかと悩むわけです。誰しも被災地に行って悩むことは多いんです。今まで経験したことがないことばかりで、でもその中から、彼なりにこう迷いながら揺れながら、少しずつ考えが定まり、自分ができることを見つけていくのです。

最後に、彼が書いているのはやっぱり「一人一人の話を傾けることの大切さ」です。僕らのNGOが「最後の一人まで」と理念を掲げていて、被災地に行く前には、彼は言葉では知っているんですけどね。実際被災地に行ってみて、様々な悩みを抱えながら過ごすなかで、「あ、こういうことなんだ」と気づいていけます。この姿を見ることは、僕にとっても大きな学びでした。

トルコ人学生がもつ実感

現地のトルコの通訳ボランティアをしてくれたのは、日本語を勉強しているトルコ人学生でした。彼らが滞在中は常に同行してくれたのですが、彼らの感想も良かったです。

「これからのトルコは何が必要だと思いますか？」との質問に対して、「まず

CODE「トルコ・シリア地震救援ニュース」
レポート「若者が見た被災地」から見えること⑤

■ 被災地を見てどんなことを感じましたか？
ウムー）東京から来たという印象が強く感じました。

■ これからの支援は何かの支援が必要だと思いますか？
ウムー）助けたいですが、まずは仕事をちゃんとこなす必要があると思います。

■ 現地ボランティアの経験はどのくらいありましたか？
ウムー）学生、旅行、飲み、全てを体験しました。


■ どんな経験をしましたか？
ウムー）イマム会館が1/18に壊れたのがとても衝撃的でした。

■ 自分が一番苦しかったですか？
ウムー）一番辛いのは、現地の人がボランティアではなく、命によって差別されていることだと思います。

■ 私、2週間ボランティアの機会が無く参加できませんか？
ウムー）もちろんです。これは大変な状況だから、必ず助けたいです。

■ 日本へ3000人ボランティアに来てどう思いますか？
ウムー）1000名程度でいい。3000名は政府が来た方がいいと思います。

ウムートさん
(23歳)
ネブシェル大学3年生



(図16)

自分は、被災地に行かないほうがいいんだ」と思ってしまう人が少なくないのです。その場にいた学生たちの多くは、この高齢男性の言うことに賛同したそうです。

このことは、すごく考えさせられます。若い人たちが何かやりたい、災害をきっかけに何かしたいと思う気持ちをどう受け止めるか、これは社会や大人が問われていることだと思います。

僕自身も、経験のない若い時に被災地に行ったことから、多くのことを知り、そこから考え、今につながっています。だから僕は、若い人たちにもそう接していきたいです。僕は東洋医学を学んで来ました。野口晴哉という整体の大家が「自分が至らないからまだ人を救えないとか、教えられないという人がいるけども、至った人間なんか昔から一人もいない。至らないままに人を導き、教え、救っていると、だんだん至る道に近づいていく」と言っています。




振り返ると、阪神淡路大震災の時、1年間に137万人ものボランティアが神戸に駆けつけました。その7割は、ボランティアが初めてでした。とにかく被災地で何かできないかという思いで駆けつけた。最初はだれもが初心者だったということです。

現在の日本は、どのような場所でも、たとえば実務経験3年が必要などと言われる。このように条件を付けられてしまうと、経験がない若者は思いがあっても踏みだせないのではないのでしょうか。どんな場所でも誰かが最初の一步を踏み出してきましたし、そうして実務経験を積んできたんですね。確かに、若い人たちは未熟で、被災地に行っても迷惑かけるだけかもしれない。野口晴哉の言葉は、「未熟ながらも、迷いながらも、行動しているうちに、いつの間にかそういう道に至っている」ことを言っており、若い人たちに当てはまると思います。これは僕自身の経験を踏まえてもそう思います。

若者の育成と地域への影響

阪神淡路大震災を契機にできたNGO、NPOの多くは、高齢化が進んでいます。CODEでは、一早く「未来基金」を設立しました。若い人たちに、海外の被災地で学んでもらうもので、愛媛大学教育学部の卒業生の高橋大希君も参加しています。若い人たちは有給のインターンシップで、フィリピン、ネパール、中国で活動をしてきました。この基金を利用して活動した人たちは、その後も面白い生き方をしています。高橋君もその一人です。

自給自足の生活をする女の子がいた

CODE未来基金(2015年設立)		
主旨:次世代のNGOを担う若者を応援するための基金		
内容:1. インターンシップ(半年間有償で、これまでに2名が経験)		
2. 海外の被災地フィールドワーク(11名が参加・若者自身が企画)		
3. NGOセミナー(身近な勉強会)		
対象:学生や若者(30歳前後)		
		
場: 高橋大希君(元)インターンシップ 参加者:神戸大学4名 テーマ:「学生にできること」	場: 日本ユニセフ事務所 参加者:長崎県立大学、愛媛大学、神戸学院大学各6名 テーマ:「山形県の復興」	場: 中国・成都 参加者:神戸大学学生4名 テーマ:「震後5年と被災地の子」

(図18)

り、地域で人と人をつなぐ看護師の役割が必要だとの発想でコミュニティーナスをしている人がいたり、今後の食料問題を見据えて昆虫食でソーシャルビジネスを立ち上げたり、高橋君は高齢化の山村と都会の若者をつないでいます。



(図19)

コロナ禍での大学生の活動

しかし、コロナ禍で海外のフィールドワークが中止になりました。若い人たちは、国内で悶々としているんですね。何かできないだろうかと模索し、僕が提案したのは農業を切り口にした国内での活動です。これまでの海外での経験から暮らしを考えたときに、どの国でも農業は非常に重要なキーワードでした。僕が農業をやらないかと声をかけたら、若い人たちがやりたいと集まってきてくれました。



(図20)

兵庫県の丹波に行き、有機農家グループと交流させてもらいながら、1泊2日で農業を学びました。夜は農家の方たちと若い人たちが話しこみます。若い人は農業を教えてもらう立場で行っていますが、農家の人たちは、若い人と話すことで気づきがあります。地域の農業を一生懸命考えてきたけれど、世界的な視点では考えてこなかったことなどです。世界では小規模農業がテーマになることが多く、様々な取り組みが行われています。日本では小規模農業の取り組みは遅れていて、そのことを地域の農家さんたちが考え始めました。こうして若い人たちと農家さんとの相乗効果が起きていくんですね。

国内でのウクライナ避難者の支援

最近、学生さんもウクライナから避難してきている人たちに野菜を届けています。ウクライナでは18歳から60歳までの男性は兵士候補でもあり、また経済を支えるために、出国できない状況です。だから、日本に避難してきている方の大半は、女性と子ども、高齢者です。多いのは、母子避難の方たちです。

避難してきたお母さん達は、仕事しながら子育てをして、慣れない日本語も勉強しなくちゃいけないので、疲れているんです。「地域には託児所があるから、そこにお

子さんを預けたらどうですか」という声もあるんですが、時間的な余裕がなく実現しないんです。そうであれば学生たちが子守りをしようとき動き出しました。自宅で子守りしている間に、お母さんに自由な時間を持ってもらって、その間お母さんが日本語を勉強したりとか、買い物行ったりとか、時にはお茶しに行ったりとか、そうやってストレスを軽減してもらいます。若者が主体的に動き、この活動を続けてきました。この活動をしてきた若者たちが、トルコに行くことを決めました。

若者は、人に直接出会って、いろんな思いとか葛藤みたいなことを聴き、肌で感じる経験をしたので、トルコに行った時も、先ほど紹介した感想につながったのだと思います。

ステイホームでは救えない命がある

2020年から2021年、日本ではステイホームが強調されていました。しかし、ステイホームでは、DVや虐待を受けている子どもや女性など、命を救えない状況があることがリアルにわかってきました。そして、人々が地域とつながっていないことが明確に見えてきました。テレビで、コロナに感染してこれだけの死者が出ている、会社が倒産している報道に触れていても、周りを見渡すと誰が困っているか全然わからない状況がありましたね。僕らは、こんなにも地域とつながっていないんだと痛感させられました。

ある大学生の子が、「コロナ禍で海外に行けないなら、この機会に足元を見直してみたら」という僕の発言を聞いて反応してくれました。その足で、地域の社会福祉協議会に行き、困っている人のために何かやりたいと申し出ましたが、「業務外のことはできません」と断られました。それで学生自身が、コロナで閉じこもっている高齢者のためのパソコン教室を開きました。そこから彼女は地域活動に目覚めていきます。大学の先生の影響もあって、現在は、東日本大震災の被災地の気仙沼で地域おこし協力隊として頑張っています。

小さなきっかけで変わってくるということです。コロナ禍で見えてきたことは、災害時に言われていることと同じだと痛感しています。平素から厳しい人たちは、災害時より厳しい状況になる。これはコロナでも一緒だったんです。その地域が抱える問題は、自然災害であろうがコロナであろうが、やはり露呈するんです。

僕たちは海外の人たちとつながっていたので、オンラインで頻繁に国際会議をしてきました。そこで見えてきたのは、ステイホームで指をくわえていたのは日本だけだということでした。ステイホームでは救えない命があることが見えてきました。災害支援の経験のある僕たちのような NGO だからこそコロナ禍でもこんなことができますよ、あんなこともできますよと社会にボランティアの可能性や価値を提示していか

なくてはなりません。

既存の枠組みを超えて

最後になります。これまで国内の地域活動と世界の国際協力は別に考えられてきたと思うのですが、世界各地にも当然それぞれ地域があります。国内の地域と世界の地域で起きていることは似通っているので、僕達はもう少し共通性を持って考えていく必要があるかなと思っています。その意味で、既存の枠組みで考える必要はないと思うようになりました。地域問題と国際支援というように分野で分けてしまうのではなく、SDGsをキーワードに自分の目の前で起きていることと地球規模の課題をどうやったら一緒に考えていけるのかを、もっと考えていく必要があると思います。そうすることによって、若い人たちも、自身の普段の活動は世界とつながっていることをリアルに感じていけるのではないかと思います。

本研究は JSPS 科研費19K21723、2021年度愛媛大学教育改革 GP、2020年度、2021年度、2022年度、2023年度愛媛大学法文学部戦略経費の助成を受けた成果の一部である。